

年次報告

調査

1 伎楽面

1) 南倉1 伎楽面 木彫 第71号 (挿図17~22)

[法量] 縦40.3cm、横27.6cm、奥行29.2cm、

重844.2g

[品質] キリ製、彩色、貼毛。

[形状] 金剛面。螺髻、有髭の壮年相。瞋目、開口。

[構造・技法]

縦一材製で、木心をやや後方に外す。髻は別材で、底面に丸柄を作り出して、本体頭頂に開けた柄孔に差し込む(挿図1)。その柄先に楔は見え、柄孔との隙間から灰白色の顔料状のものがはみ出して固まっている。面内部は外形に合わせておらず平滑に割り、瞳、鼻孔、口は貫通させ、耳朶に大きく孔を穿つ。口髭および顎髭は麦漆様のもので接着(口絵17)。

彩色は頭髮に黒漆を塗り、肉身部は白色下地を塗った上に、目と歯を除いて有機系の褐色を塗り(口絵18)、とくに頬や耳の内面を濃く量かす。目は輪郭を墨描きし、目尻に赤色、白目は灰黒色、瞳は孔の周囲に緑色を塗る。唇は朱を塗って輪郭を墨描きし、歯には灰黒色を塗る。髪際、髻、眉は墨毛描き。

[紫外線(波長365nm。以下同じ)蛍光] 肉身部が黄色の蛍光を発する以外には蛍光反応無し。

[X線回折・蛍光X線分析]

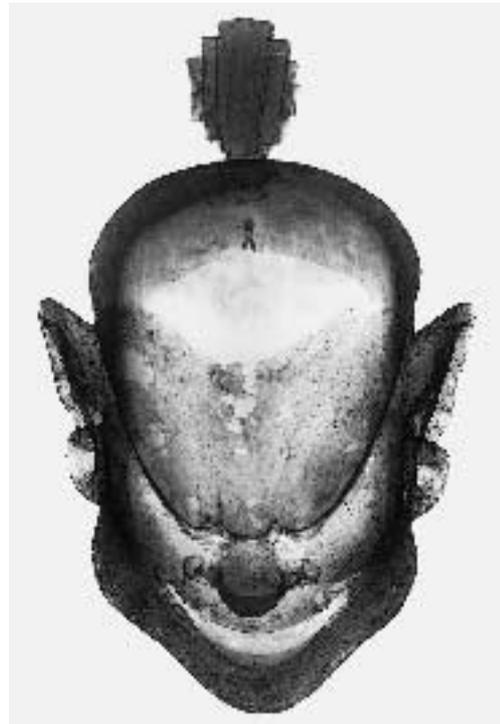
蛍光X線分析はX線回折装置に付属するEDS(エネルギー分散型X線分析装置)検出器を用いて行なった。位置的な制約からEDSのみを実施した箇所もある。

①肉身(暗褐色)

検出鉱物または化合物; 硫酸鉛(Anglesite)、石英(α -Quartz)

検出元素; 鉛(Pb)、銅(Cu)、鉄(Fe)、チタン(Ti)、カルシウム(Ca)、カリウム(K)、塩素(Cl)、イオウ(S)、ケイ素(Si)

所見; 硫酸鉛は下地の白色顔料に由来。ケイ素も確認できるので下地には白土も併用されて



挿図1 南1 伎楽面 木彫 第71号 X線透過写真(30kVp、5mA、60sec、135cm)

いると推定できる。褐色は有機系色料と推定できる。

②肉身の頬（やや赤い暗褐色）

検出鉱物；d = 3 36 に辰砂の最強線に一致する回折線が見られるが、他は顕著な回折線なし。

検出元素；水銀（Hg）他は①の部分で検出された元素と同じ。

所見；頬には朱をさしている。

③唇（赤）

検出鉱物または化合物；辰砂（Cinnabar）、カリウム硫酸鉛（Palmerite）

検出元素；鉛（Pb）、水銀（Hg）、銅（Cu）、鉄（Fe）、チタン（Ti）、カルシウム（Ca）、カリウム（K）、塩素（Cl）、イオウ（S）、ケイ素（Si）

所見；カリウム硫酸鉛は下地に由来するものと考えられる。

④牙や白目（黒）

検出元素；銀（Ag）、鉛（Pb）、銅（Cu）、鉄（Fe）、チタン（Ti）、カルシウム（Ca）、カリウム（K）、塩素（Cl）、イオウ（S）、ケイ素（Si）

所見；灰黒色は銀泥。

⑤目の瞳の近くの圏線

検出元素；銀（Ag）、鉛（Pb）、水銀（Hg）、銅（Cu）、鉄（Fe）、チタン（Ti）、カルシウム（Ca）、カリウム（K）、塩素（Cl）、イオウ（S）、ケイ素（Si）

所見；圏線は緑色の銅化合物による。

⑥黒漆類（頭髪部、髭部）

検出鉱物；石英（ α -Quartz）、長石類

検出元素；鉛（Pb）、ジルコニウム（Zr）、イットリウム（Y）、ストロンチウム（Sr）、ルビジウム（Rb）、銅（Cu）、鉄（Fe）、マンガン（Mn）、チタン（Ti）、カルシウム（Ca）、カリウム（K）、塩素（Cl）

所見；石英や長石あるいは鉄（Fe）は下地の漆地粉に由来。

[考察] 複数の回折X線に基づき下地としての硫酸鉛の存在をはじめて確認した。

[備考] 本伎楽面は毛利が第4類、成瀬がW2式（大田・葱坂式）としたものにあたる。

[修補損傷等] 平成12年度修理、本号年次報告「修理3 伎楽面」参照。

[調査方法] 実体顕微鏡、紫外線蛍光、赤外線反射、X線透過、X線回折、蛍光X線分析。

（成瀬正和・西川明彦・三宅久雄）

2) 南倉1 伎楽面 木彫 第76号（挿図23~28）

[法量] 縦41.4cm、横20.2cm、奥行26.4cm、重750.8g

[品質] キリ製、漆地彩色、植毛。

[形状] 帽子を着けた老年相。開口。

[構造・技法]

帽子を含めて縦一材製。木心は帽子左側面後方寄りから顎にかけて通るが、顎では後方に外れている。帽子は後背面より割り込み、頭頂をまるく彫り残す。帽子左側面では木心が脱落し、貫通孔となる。面内部は外形に合わせて平滑に割り、目、鼻孔、口は貫通させ、耳朶にも孔を穿つ。なお両目は割り方が粗雑で、完成後、大きく開け直したものであると思われる。また、両耳ともに内面中央および耳の上部後方に貫通孔が穿たれ、そのうち右耳後方には革平紐残欠が残る。ほかに額から帽子との際の両耳上部後方にかけて4箇所釘孔があるが、いずれも釘頭はねじ切れて残らない。ただし、右耳後方の面内側に貫通した銅釘の先を曲げた箇所が残る。X線透過写真によると左耳後方の釘孔以外の3箇所に木地の内部に釘が残っていることが確認できる(挿図2)。眉、口髭、顎髭は中空でストロー状になった毛を束ねて、根元に木栓を差して植毛する(口絵19・20)。いずれも現在根元から先は折損欠失している。



挿図2 南倉1 伎楽面 木彫 第76号
X線透過写真(30kVp、5mA、
60sec、135cm)

帽子は下地を施さず黒漆を塗る。肉身体は灰白色の漆下地を施し、黒漆を塗る。さらに炭酸カルシウムと鉛系白色顔料を併用した白色下地を施した上に鉛丹を全面にごく薄く塗り(口絵21)。額、目の周り、頬、顎、耳内面に朱を量かず。目は輪郭を墨で縁取り、白目に緑青を塗る(口絵22)。唇は輪郭を墨でくくり、鉛丹を塗った後で朱を重ね塗りする(口絵23)。さらに肉身体には全面に油状のものを塗布したのか、耳周辺に茶色い油状の溜まりが残り、また額の皺を薄墨で線描きし際立たせる。

[紫外線蛍光] 肉身体は橙色、植毛や革紐は黄色、帽子や木地には蛍光反応見られず。

[X線回折・蛍光X線分析] 『正倉院年報』16「年次報告」参照。

[考察] 漆下地の上に塗られた白色下地は全面に細かい干割れと大小の穴が確認できる(口絵24)。このような状態のものをほかに見ないが、顔料層自体はあまり弱っていない。

[備考] 本面の役柄は従来「太孤父」に比定されていたが、「治道」と考えられる。

[修補損傷等] 平成12年度修理、本号年次報告「修理3 伎楽面」参照。

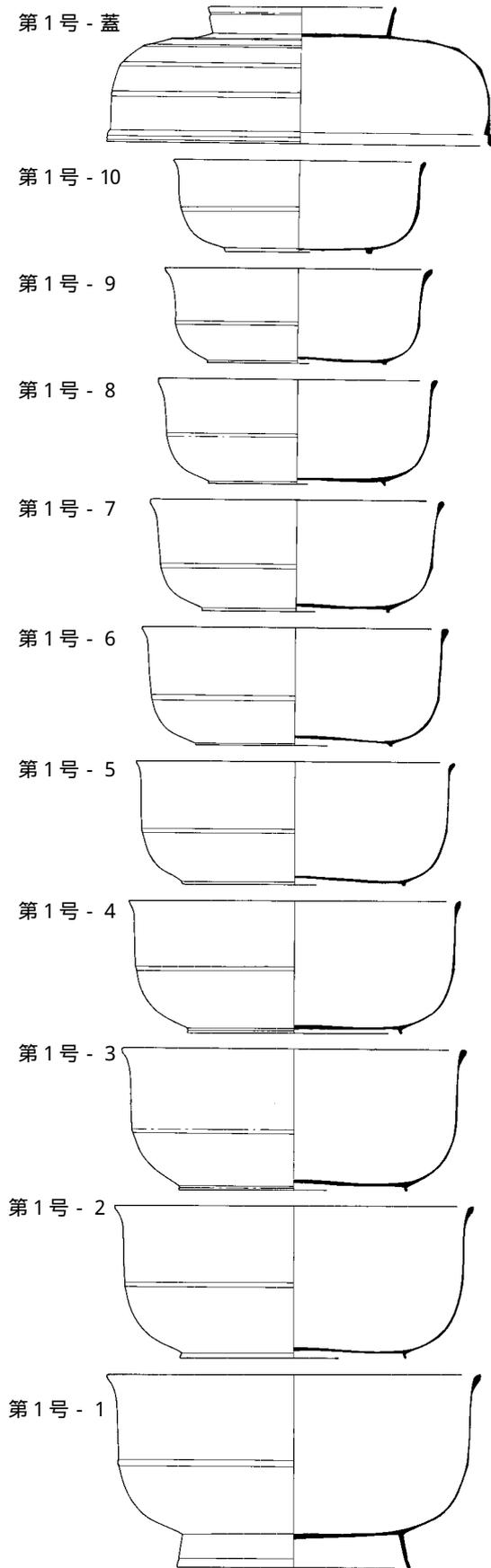
[調査方法] 実体顕微鏡、紫外線蛍光、赤外線反射、X線透過、X線回折、蛍光X線分析。

(西川明彦・成瀬正和・三宅久雄)

2 佐波理

1) 南倉47 佐波理加盤 第1号(挿図3)

[法量] 最大径17.2cm、総高14.3cm、総重量2492.2g



[品質] 佐波理製、鑄造轆轤挽き仕上げ。

[形状] 蓋付きの入れ子式鉢10口。

[銘記] 蓋外面に「十重」「八重」「用盤五」の墨書および「十」の白書痕あり。なお、「十重」と「八重」は別筆と思われ、「八重」および「用盤五」は墨で塗り潰した痕あり。

鉢10の内底に「萬」と内側にかけて「三両一分三朱」の墨書あり。鉢1の外側に白緑で書いた文字「六」(六または八)の痕跡あり。

[構造・技法]

蓋は輪状鈕を持ち、鈕の口縁部は外側に圈線を巡らせ、それを境に膨らみ玉縁風を作る。蓋の外面は鈕より内側に2重圈線を2重に巡らせ、鈕外側から口縁にかけては2重圈線で挟まれた凸帯を4重に巡らせ、各凸帯を境に屈曲する。口縁部は外面に玉縁風に膨らみを作り、そこに2重圈線を刻む。口縁部内面には鉢1の口縁が掛かるように段欠きを作る。

各鉢は端反り形で、口縁部が肥厚し、高台を有す。いずれも側面中央の腰部分に2重圈線を巡らせ、高台より内側に2重圈線を2重に巡らせる。高台は一番外側の鉢1は1.5cmあるが、他は1~3mmで、鉢1のみ高台口縁に圈線を巡らせそれを境に玉縁風に膨らむ。

いずれも器壁の厚さは口縁部と底裏を除くと、1mm以下という薄さで、部位によっては0.3mmにまで削られている。なお、鉢10は他に比して高台が分厚く、若干様子が異なる。

0 5 10cm

挿図3 南47 佐波理加盤 第1号 実測図

[X線回折・蛍光X線分析]

それぞれの佐波理加盤と標準試料のEDSによって、錠1～9と蓋は銅(Cu)82～84%、スズ(Sn)10～13%、銀(Ag)1%、ヒ素(As)1%、鉛(Pb)2～3%、錠10は銅(Cu)82%、スズ(Sn)18%、銀(Ag)3%であることが明らかになった。いずれもX線回折によってCu-Sn系合金の相と相に基づく回折線が確認でき、熱処理をおこなっていることがわかった。

[調査方法] 実測、蛍光X線分析、X線回折。

(西川明彦・三宅久雄・成瀬正和)

3 聖語蔵経巻

平成12年度における聖語蔵経巻の調査は、前年度に引き続き、乙種写経第204号阿唎多羅陀羅尼經から第207号摩訶般若放光經巻38までの計20巻について実施した。

1) 乙種写経 第204号 阿唎多羅陀羅尼經

『聖語蔵経巻目録』は経巻名を「阿刹多羅陀羅尼經」に作る。原本を検したところ、内題「阿唎多羅陀羅尼經阿魯力迦品第十四」、尾題「阿利多羅魯力經」と判読するのがよいと思われる。

『大正新脩大蔵経』No.1039「阿唎多羅陀羅尼經阿魯力經」であろう。内題に見える「第十四」は何に基づく序数か未詳。

[法量] 縦25.7cm、横53.2cm(完全1紙)ほか。全長1083cm。標準的な規格として界高19.4/19.8cm、界幅1.8cm。1行17字、1紙に29行。

[品質形状] 紙本墨書。卷子装。本紙は白楮紙23張。淡褐色紙標(原標10.0cm存)。新補黒漆塗割軸。

[備考] 第1紙端裏および尾題次行に「一校畢」の墨書あり。

2) 乙種写経 第205号 度一切諸仏境界智嚴經

[法量] 縦26.0cm、横45.1cm(完全1紙)。全長539cm。界高19.9cm、界幅1.9cm。1行18字、1紙に25行。

[品質形状] 紙本墨書。卷子装。本紙は黄楮紙12張。黄褐色紙標、紐微存。黒漆塗細手棒軸。

[備考] 尾題次々行に「文永三年(1266)正月十二日一交畢 頼承」の墨書あり。

3) 乙種写経 第206号 仏入涅槃密迹金剛力士哀恋經

[法量] 縦25.4cm、横52.8cm(完全1紙)。全長312cm。界高20.0cm、界幅1.8cm。1行17字、1紙に28行。

[品質形状] 紙本墨書。卷子装。本紙は白楮紙6張。淡褐色紙標。黒漆塗朱頂割軸。

[備考] 各紙背左方に墨宝塔印あり。

4) 乙種写経 第207号 摩訶般若放光経 17巻のうち16巻

『聖語蔵経巻目録』は巻2～4, 7～13, 15～20, 38の計17巻を載せる。摩訶般若放光経は、西晋無羅叉訳、90品20巻で、ふつう「放光経」「放光般若経」と呼ばれる。したがって巻38という巻が存在するのはやや不審であるが、これは別の經典であることが判明した(5に後述)。

[法量] 各巻の料紙は、ほぼ安定した規格をそなえている。縦26.4～27.0cm、横は完全一紙の場合51.5～52.6cmで、1紙27行を標準とする。墨界線は界高20.7～21.0cm、界幅1.8～2.0cm。1行17字も全巻ほぼ共通である。

巻2: 全長821cm。巻3: 全長763cm。巻4: 全長875cm。巻7: 全長857cm。巻8: 全長835cm。巻9: 全長799cm。巻10: 全長943cm。巻11: 全長771cm。巻12: 全長858cm。巻13: 全長780cm。巻15: 全長792cm。巻16: 全長773cm。巻17: 全長716cm。巻18: 全長746cm。巻19: 全長686cm。巻20: 全長793cm。

[品質形状] すべて紙本墨書。卷子装。本紙は色の濃い黄褐色味を帯びた楮紙。標紙は、僅かに赤みを帯びた褐色紙標。巻4・7・12・13・15は原標紙に大きな損傷があり、欠失部分を新たに補った。軸は各巻とも黒漆塗割軸。

巻2: 本紙16張。巻3: 本紙15張。巻4: 本紙17張。巻7: 本紙17張。巻8: 本紙17張。巻9: 本紙16張。巻10: 本紙19張。巻11: 本紙15張。巻12: 本紙17張。巻13: 本紙15張。巻15: 本紙16張。巻16: 本紙15張。巻17: 本紙14張。巻18: 本紙15張。巻19: 本紙14張。巻20: 本紙16張。

[備考] 本経のうち、巻4・7・10・11・15・17の紙背は空であるが、他の巻には、裏花押がある。原則として、花押は紙1張を単位に一つ加えるものらしく、料紙の変化と花押の有無・種類とは対応する傾向があるが、1紙に対して複数の花押が加えられることはない。花押のうち一種が全体で多数を占め、巻2・3・8・9・12・16・18はこの花押だけが現れる(巻8・12・16は一巻のうち数紙だけに現れ、他の巻はもう少しまとまった現れ方をするが、巻の全体に花押のある巻は存在しない)。複数種の花押が現れる巻では、巻13は、多数派の花押と別の小さい花押が交互に現れる。巻19の花押は全体に疎な分布で、多数派の花押に加えて、最終紙に大きな花押が現れる。この大きな花押(文字の高さ5～7cm)は、次の巻20になると巻首から9紙連続で現れる(その後小さな「多数派」花押が一回だけ現れる)。

5) 大智度論 巻38

乙種写経第207号 摩訶般若放光経 巻38とされていたもの。修補に先立つ調査の結果、これは大智度論釈往生品巻38であることが判明した。

内題・外題ともに欠失して不明。尾題に相当する位置には「巻第卅八」とだけある。巻首端裏の位置に、後筆で「奥二第卅八有、題不知 般若経」と記されている。ここから本巻を摩訶般若放光経と認定した経緯は不明であるが、大智度論は摩訶般若波羅蜜経の註釈書であり、「摩訶般若波羅蜜経釈論」の別名で呼ばれることも多いことと何らかの関係があるかもしれない。

[法量] 縦26.5cm、横54.5cm(完全1紙)。全長810cm。界高19.6cm、界幅1.7cm。1行17字、1紙に31～32行。

[品質形状] 紙本墨書。卷子装。本紙は褐色楮紙16張、首欠。赤密陀撥型軸。軸端は両端とも新補であるが、旧物の軸木に残る顔料に合わせて推定復元したものである。聖語蔵の大智度論を一瞥すると、本巻は、甲種写経38号所属の大智度論巻61・巻63と、料紙の規格・紙質・書風・尾題の形式などの点で同一類に属すると思われる(甲写の軸は黒漆塗り。これから考えると乙写大智度論の赤密陀撥型軸はやや違和感がある)。甲写38号は複数種の経巻を取り合わせて構成されており、うち、巻79には「永久元年(1113)八月九日於大毘盧舎那寺書了」の書写奥書があるが、ここで問題としている巻61・巻63とは体裁等にやや開きがあり、本巻の書写時期については別に考える必要がある。

[備考] 全体にわたって、白書によるかなり密な加点あり。甲写38号巻61は白点なし。同巻63は、白点は見られるが、乙写巻38ほどの分量はないようである。

(杉本一樹)

染織品の整理

平成11年11月の西宝庫定例開封終了後から、翌12年10月の定例開封までの間に整理した染織品は次の通りである。

1 古裂帳

染織小裂片を貼り交ぜた台紙(40×30cm)を20枚綴じ付けて、以下の帖冊として整理した。染織小裂片は、織り方と染色の別に分類して、薄い生麩糊を用いて貼付した。

第893号	夾纈純類	全212片	中倉202	第80・81号櫃出櫃
第894号	諸色純類	全221片	中倉202	第80号櫃出櫃
第895号	諸色純類	全241片	中倉202	第80号櫃出櫃
第896号	布類	全274片	中倉202	第80号櫃出櫃

(尾形充彦・田中陽子)

修 理

1 染 織 品

平成11年11月の西宝庫定例開封終了後から、翌12年10月の定例開封までの間に次の染織品の修理を行った。

1) 北倉92 芫花袋 第1号(挿図4～7)

[法量] 縦54.5cm、横27.5cm

[品質形状] 一幅の糸を中心で縦に二つ折りにして、さらに真ん中で横に二つ折りにして、糸の耳が四枚重なった方の長側縁を四枚重ねてぐし縫いで縫い綴じ、袋の口付近を約10cm程開けておき、開けた穴の部分から全体を裏返して袋状にし、最後に、裏返した穴の部分の縫い目が表に出ないように縫い綴じてある。なお、大きな破れ穴や綻びた個所がないので、縫い方について確認が出来なかった。また、一方の長側(裂地が輪になっていない方)の底裏に近い下端の小さな破れ穴から糸の耳を二枚分確認出来た。したがって、袋の横幅は27.5cmであるから、縁の縫い代として約5～7mmを加算すれば、この袋に用いられている糸は規定の織り幅(1尺9寸=56.4cm)に近い。このように織り幅とほとんど同じ寸法の糸が用いられている場合、正倉院の染織品の中に耳を裁ち落としている例はほとんどないので、この袋は、両耳を残す一幅の糸が使用されたと推定出来る。

[修理前の状態]

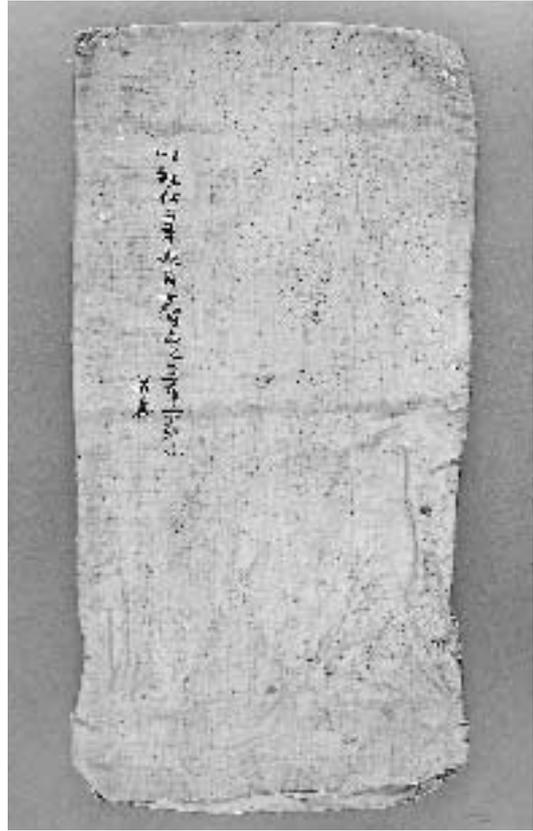
- ・表裏全体の諸処に、小さな破れ穴が存在し、小さな筋切れが生じていた。中でも、裂地が輪になっている側の袋の口の近くと反対側の長側の底裏近くが、やや大きく筋切れていた。
- ・裂地の表面には、経年変化により弱った絹にみられる粉末状のものが少しみられ、裂地が湿り気を帯びたように重く感じられた。
- ・表裏両面にフォクシングと称すべき円形の茶色のしみが幾つも発生していた。
- ・最近まで小さく折り畳まれて整理されていたが、絹が弱っている状態なので折り皺が筋切れる恐れがあり、現に破損個所もみられたので修理を行った。修理に際して伸展すると、筋切れは生じていなかったが、二本の深い折り皺が生じていた。

[修理の仕様]

- ・破れ穴や筋切れ部分には、適当な大きさに切断した薄和紙(漆漉し)を内側から貼付した。糊は、イオン交換水で溶いたごく薄い生糞糊を用いた。ごく小さい破れ穴は補修しなかった。
- ・二本の深い折り皺は後世のものなので、イオン交換水で軽く湿らせた上から重しを置いて伸ばすようにした。袋の口の付近の細かい皺は、口の辺りを絞った時に発生した当初からのものと考えられるので伸展しなかった。



挿図4 北倉92 芫花袋 第1号 表 (修理前)



挿図5 北倉92 芫花袋 第1号 裏 (修理前)



挿図6 北倉92 芫花袋 第1号 表 (修理後)



挿図7 北倉92 芫花袋 第1号 裏 (修理後)

[備考]

- ・この袋には、口の辺りを絞って出来た皺があり、今では紐は伝わっていないが、紐で縛っていた可能性がある。
- ・伸展して修理したため再度折り畳むことが出来ず元の収納容器に戻せないで、これまでの場合と同様に畳紙に納めた。
- ・袋の表裏に以下の墨書並びに朱書がある。
(表墨書)「元花一斤四兩廿五櫃」、「袋二兩 見定一斤四兩 ^三大并袋 _{二銖} 合」、「今定一斤二兩」
(表朱書)「定三斤九兩 少并袋」
(裏墨書)「以弘仁二年九月十八日定三斤六兩小」 (表の墨書に対して天地逆)
并袋

2) 中倉95 紫皮裁文珠玉飾刺繡羅帶残欠及び付属刺繡褌(挿図8~15)

[法量] 羅帶の最大片の長85cm、幅7cm 錦帯の長82cm、幅9cm 刺繡褌の最大片の長83.2cm、幅16.9cm 紫皮裁文及び刺繡残片の最大片の縦13.2cm、横9.3cm

[品質形状] 刺繡羅帶の地の部分は、真綿芯を白の平絹で二重に包み、表面に褐色の小菱格子文羅を張り、裏面に目交絞纈綾(文様不明、綾地異方綾文綾)を付けている。飾りは、表面全体に無撚りの平糸を用いて、刺し繡いと平縫いで連珠格子と花文の刺繡を施し、両端と中間に紫皮の忍冬文裁文飾りを縫い付けて、周縁に矢羽文の丸打ち組紐を二重に綴じつけ、両長側にガラス玉、真珠、水晶玉を絹糸に通して、金銅製の萼で飾った水晶(又はガラス)の露玉を先端に付けた垂飾を幾つか取り付けている。なお、今では珠玉の垂飾の多くが失われており、片長側には僅かな痕跡しか残っていない。現在四片に分かれているが、各片の長さを加えると約2m30cmになり、当時の標準的な帯の長さになるので、四片で帯一条の断片と推定される。

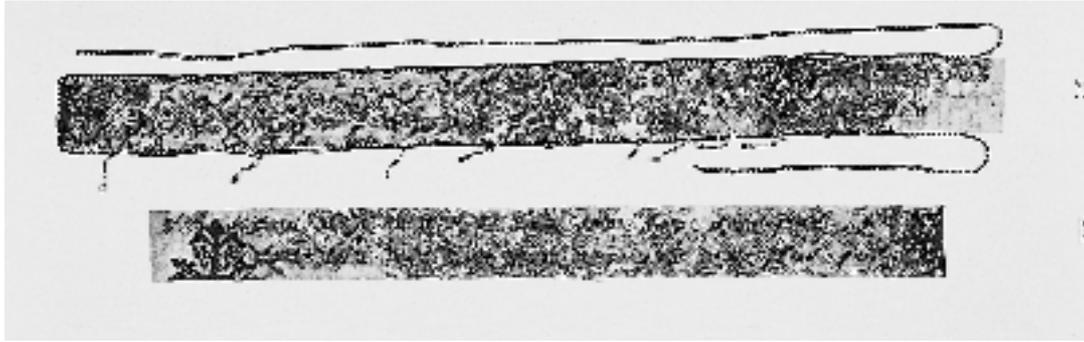
ところで、中倉95の付属品として、紫皮裁文錦帯一条、刺繡褌残片三片、紫皮裁文五片、刺繡残片十片が存在する。以下、順に述べる。

錦帯は、表が錦、裏が夾纈純、芯が白麻布で、両端に紫皮の忍冬文裁文飾りを縫いつけている。なお、幅の広い個所がある特異な形をしている理由は不明。

刺繡褌の地は、白の純の袷の間に真綿を挟み、鏡面に白羅、額縁に茶羅を縫い付けている(挿図16)。刺繡は、無撚りの平糸を用いて主として刺し繡いで、鏡面に山水、額縁に花葉文を表している。紫皮裁文は、上記の帯に縫い付けられているものと同様のもの。刺繡残片は、刺繡褌の額縁と同様のものと、それとは異なり、どのような刺繡の部分片か不明のものが混在している。

[修理前の状態]

- ・羅帶残片四片と錦帯は、平絹を張った板の上に載せてそれぞれ数力所を糸で止めてあり、羅帶の周囲には絹が弱って粉状となったものが出ていて、珠玉の垂飾の芯糸が切れかかっていた。敷き板に張ったの平絹に羅帶から出た粉状のものが散らばっている周囲には、茶褐色のしみが発生しており、粉状のものが所謂フォクシングの原因の一つと考えられた。褐色の羅



挿図8 中倉95 紫皮裁文珠玉飾刺繡羅帶残欠（修理前）



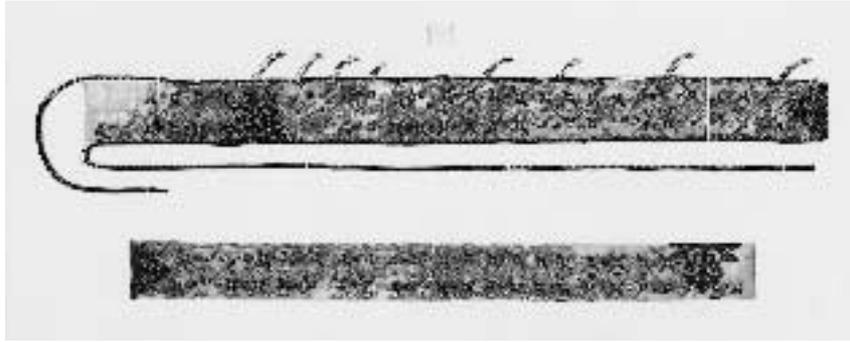
挿図9 中倉95 紫皮裁文珠玉飾刺繡羅帶残欠及び錦帯（修理前）



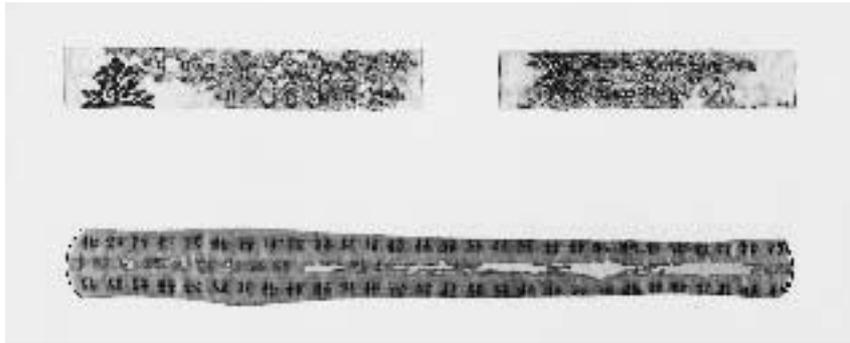
挿図10 中倉95 付属刺繡襦袢残片（修理前）



挿図11 中倉95 付属紫皮裁文刺繡残欠（修理前）



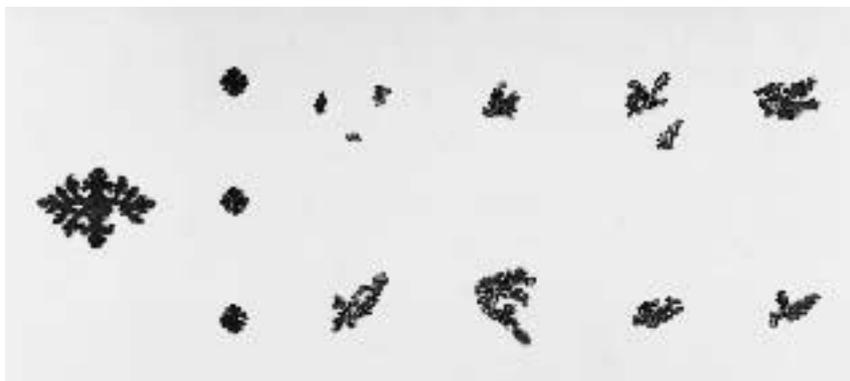
挿図12 中倉95 紫皮裁文珠玉飾刺繡羅帶残欠（修理後）



挿図13 中倉95 紫皮裁文珠玉飾刺繡羅帶残欠及び錦帯（修理後）



挿図14 中倉95 付属刺繡褌残片（修理後）



挿図15 中倉95 付属紫皮裁文刺繡残欠（修理後）



挿図16 中倉95 付属刺繍襦袢残片（最大片）（裏面の調銘と国印）

が貼付されているので目立たないが、羅帯の表面の粉状のものの周囲にもしみが発生しており、表面の清掃が必要な状態であった。

- ・刺繍襦三片は二枚のガラス板の間に挟んでガラス装として整理されていた。紫皮裁文五片及び刺繍残片十片も同様にガラス装として整理されていた。今ではガラスが古びて不透明になっている部分があり、経年変化と長時間ガラスに圧迫されていたため、刺繍は平たくなって地裂が弱り部分的に糸切れを生じていた。

[修理の仕様]

- ・糸で止められている羅帯と錦帯を敷き板からはずして、羅帯の表面の粉状のものや錦帯の表面の埃を落として、切れて飛び出している糸を押さえて形を整えるだけにした。飛び出している糸がそれほど多くなく、全体が崩壊しかかかっていないので、今回の修理では糸に直接薄糊を付けて止めたり、薄和紙で裏打ちする必要はないと判断したためである。
- ・ものの形に合わせた窪みを付けた台紙を作り、窪みの中に帯を落とし込み、テープ状の薄和紙を用いて数カ所を軽く固定した。珠玉の垂飾もテープ状の薄和紙で固定して、切れかかっている芯糸を保護した。
- ・刺繍襦残片、紫皮裁文、刺繍残片をガラス板から取り出し、帯と同様に台紙の窪みの中に落とし込み、テープ状の薄和紙で軽く固定した。

[備考]

- ・帯や刺繍襦や刺繍残片などを台紙の上に並べるときに、互いに接触しないように従来よりも余裕を持たせたので、元の収納容器に戻せない状態になり、台紙をそれぞれ畳紙に納めた。
- ・裏の糸は、讃岐国印の一部と以下の墨書銘(「香」と「一」は今回新たに読めたもの)が残っているので、讃岐国調糸である(挿図16)。

「讃岐国^(香)河郡□□」, 「□□一尺九□□」

(尾形充彦・田中陽子)

2 聖語蔵経巻

平成12年度における聖語蔵経巻の修理は、平成11年秋に出蔵した下記の経巻合わせて30巻について行った。

1) 甲種写経 第51号 大方廣佛華嚴経 巻46・47・49・50・53の5巻

[法量] 本紙の縦27.1~27.2cm、横51.2cm前後。界高20.5~20.7cm 界幅1.8cm。

[品質形状] いずれも卷子装。軸端撥形金銅製。軸は棒軸。

[修理前の状態]

- ・濃い褐色に染められた厚手の標紙・本紙は、ともに紙質が堅くて脆いため、所々に折れや紙継ぎ部分の糊離れなどが生じていた。小さい虫喰い穴も諸処にみられた。しかし、大きい破れや欠損はなく、標紙の発装竹は全て完存していた。

[修理の仕様]

- ・紙継ぎ部分の糊離れが生じているところを生麩糊で接着した。針穴状のごく小さな虫喰い穴の補修はしなかったが、他の虫喰い穴は、標紙と本紙に合わせた適当な厚さの楮紙（美濃紙）を、それぞれ補修部分よりもやや薄い色に染めて、適当な大きさに千切り、裏側から生麩糊で接着した。補紙の染色は、二種類の褐色の染料（阿仙と丹殻）を別々に刷毛で引き染めし、何度か重ねて、さらに上から薄く墨を引いて色に渋みを出した。

2) 乙種写経 第215号 大般若経 巻463～同巻495までの25巻

[法量] 本紙の縦27.1～27.5cm、横51.2cm前後及び46.5～48.5cm。界高20.2～20.7cm、界幅1.8cm前後。

[品質形状] いずれも卷子装。軸端撥形木製。軸は割軸。

[修理前の状態]

- ・いずれも表紙は縹色、本紙は白紙で表裏に雲母粉が散らされていた。
- ・虫喰い穴や破れはどの経巻にもみられたが、多い少ないの程度は様々であった。標紙の一部又は全部を失なうものがあり、発装が欠けていたり表題が読めないものもあった。また、本紙に虫糞や泥などの汚れの表面付着がみられた。
- ・巻紐は、薄褐色の細幅の織紐で長さ数センチ以上残っているものは少なく、端が発装部分に付着して微存しているものがほとんどであった。

[修理の仕様]

- ・標紙の失われているものは、欠失部分を補った。用いた補紙は、標紙に合わせた適当な厚さの楮紙（石州紙）を発酵建した天然藍で標紙よりもやや薄く染めて、上から薄く墨を刷毛で引き染めしたものである。発装の欠けている部分も新しい竹製のものを補った。表題が全く読めないものは、本紙の内題と尾題を参考にして、新題箋に墨で書いて標紙の補修部分に貼付した。
- ・表面に付着した虫糞は取り除いたが、泥汚れは落とさなかった。
- ・虫喰い穴や破れた箇所は、本紙に合わせた適当な厚さの楮紙（石州紙）を、破損の大きさに合わせて適当な大きさに千切り、裏側から生麩糊で接着した。針穴状のごく小さな虫喰い穴の補修はしなかった。
- ・軸と軸端の欠失したものは、似合いのものを新規作成して補った。

（尾形充彦・田中陽子）

3 伎楽面

平成12年度（第1次第10箇年計画第8年度）の対象面と修理概要は次のとおりである。

1）南倉1 伎楽面 木彫 第71号（挿図17～22）

[法量] 縦40.3cm、横27.6cm

[品質形状] 桐材、彩色、貼毛（詳細は「調査」の項参照）

[修理前の状態]

- ・全面に埃が付着する。
- ・左顔面や頭部に泥状の汚れが被る。
- ・顔面の顔料層は比較的しっかりしているが、ところどころ剥落しており、特に目、歯の剥落部周辺では顔料層が粉状化する。
- ・頭部の髻を接合した柄孔が緩み、隙間ができています。
- ・後頭部の縁から木目に沿って大きな割れが入る箇所があり、周囲の漆膜に亀裂・浮きあり。
- ・後頭部の縁や髻に漆塗膜が剥落して木地が露出する箇所があり、周囲の漆に亀裂や浮きあり。
- ・頭部の漆塗膜に細かい断文が生じている。
- ・口唇の一部、木地が虫蝕により失われ、周囲が脆弱化。
- ・左頬の髭の一部の接着が弱り、脱落の恐れあり。

[修理仕様]

- ・内外面の埃は柔らかい筆を用い可能な限り除去した。
- ・顔面および頭部の泥状の汚れはイオン交換水を湿した脱脂綿を用い、可能な限り除去した。
- ・頭部の漆塗膜の亀裂周辺はエタノールやアンモニアの水溶液で汚れを除去した。
- ・顔料層は膠と布海苔の混合水溶液を塗布して剥落止めを行った。
- ・髻と頭部本体との隙間には麦漆・漆木屎を充填して形状を修整した。
- ・漆塗膜の亀裂は溶剤で薄めた生漆、麦漆を数回浸透させ、圧力を加え接着した。
- ・木地の割れや漆塗膜剥落部は漆木屎を充填した。
- ・髭の接着力の弱った箇所は麦漆にて接着した。
- ・口唇部の虫蝕部は漆木屎を充填した。
- ・漆木屎を充填した箇所は表面を研磨し、周囲の色調との調和を図った。

[施工者] 岡墨光堂（彩色剥落止め）、北村謙一（木地関係）

2）南倉1 伎楽面 木彫 第76号（挿図23～28）

[法量] 縦41.4cm、横20.2cm

[品質形状] 桐材、彩色、植毛（詳細は「調査」の項参照）

[修理前の状態]

- ・全面に埃が付着する。

- ・右顔面に泥状の汚れやシミが見られる。
- ・右額部には円形に顔料層、漆下地層が剥落し、木地が露出する箇所がある。
- ・顎先、頬など顔面下部にて顔料層の剥落が目立ち、下地の漆層が露出。
- ・黒漆の帽子全面には細かい亀裂が生じており、一部は剥落している。
- ・顔面下顎部に大きな亀裂が入る。
- ・両耳の縁で漆塗膜の剥落が見られる。

[修理仕様]

- ・外面の埃は柔らかい筆を用い可能な限り除去した。
- ・顔面の泥状の汚れやシミはイオン交換水で湿した脱脂綿を用い、可能な限り除去した。
- ・顔料層は全体に膠と布海苔の混合水溶液を上から塗布して剥落止めを行い、また特に漆層と顔料層が剥離しそうな箇所には間に同水溶液を差込み接着した。
- ・帽子部は泥状の汚れを純水で湿した脱脂綿を用い除去し、その後エタノールやアンモニアの水溶液などを用いクリーニングし、生漆、麦漆を数回亀裂に浸透させ接着した。
- ・面の縁や耳周辺の漆欠損部の周囲には生漆、麦漆を浸透させ接着し、欠損部には漆木屎を充填した。
- ・下顎の木地の割れ目には漆木屎を充填した。
- ・右額部の木地露出部にはベンガラ、松煙を配合した漆錆で際錆を施し、顔料層の剥落を防止した。
- ・漆木屎を使用した部分は表面を研磨し、周囲との色調の調和を図った。

[施工者] 岡墨光堂（彩色剥落止め）、北村謙一（木地関係）

（成瀬正和・西川明彦）



挿図17 南倉1 伎楽面 木彫 第71号 (修理後)



挿図18 同左 背面 (修理後)



挿図19 同上 右側面 (修理後)



挿図20 同左 左側面 (修理後)



插图21 南倉1 伎楽面 木彫 第71号 下面(修理後)



插图22 同左 上面(修理後)



插图23 南倉1 伎楽面 木彫 第76号(修理後)



插图24 同左 背面(修理後)



挿図25 南倉1 伎楽面 木彫 第76号右側面(修理後)



挿図26 同左 左側面(修理後)



挿図27 同上 下面(修理後)



挿図28 同左 上面(修理後)

模 造

平成12年度は、北倉42鏡箱第8号付属囷の表面に用いられている八稜唐花文赤綾と南倉47佐波理加盤第1号の2件を対象として実施した。

1 佐波理加盤（挿図29）

[模造対象宝物] 南倉47 佐波理加盤 第1号

佐波理加盤は、銅に錫などを含んだ合金でできた重ね碗である。正倉院には88組436口伝わり、正倉院の金工品、飲食器を代表する一群を成している。惣型鑄造したのち轆轤挽き仕上げをし、いずれも器壁の厚さは口縁部と底裏を除くと1mm以下で、部位によっては0.3mmという薄さになっている。また、1組の碗の口径と深さを順次小さくし、ぴったりと入れ子式に重なるようになっており、精度の高い金工技法を示す。そのうち、模造対象には10口の碗に蓋を備えた、最も器形の均衡がとれたものを選んだ。

「佐波理」は現在、「響銅」、「砂張」などとも表記されるが、語源的には、朝鮮半島では金属製飲食器が「沙鉢」と呼ばれ、これが転訛したものとされている。鳥毛立女屏風旧下貼文書とされる「買新羅物解」の「迎羅」、『倭名類聚抄』の「鈔羅」は佐波理を指すとする説がある。これらのことと正倉院の佐波理製品の中に新羅の文書がはさまれていた状況などから、多くが朝鮮半島からもたらされたものと考えられている。

佐波理は金属学的に言えば、銅80%、錫20%を標準的な化学組成とする青銅の一種である。青銅はふつう「鏡青銅」と言い、高熱で溶かした金属が固化する段階で、放冷することによって得られるが、佐波理に用いる青銅は「鐘青銅」と言い、金属が固化する過程において600以下で急冷するか、あるいは、いったん鑄造した金属を、700前後に再加熱し水中での急冷を数



挿図29 佐波理加盤 模造品

回繰り返すなど、特別な熱処理を加えることによって得られる。「鐘青銅」は「鏡青銅」とは金属組織が異なり、轆轤挽きや鍛造に適した物理的性質を有す。

模造対象とした原宝物の各鉢や蓋の化学組成は微妙に異なっていたが、その平均的な化学組成をもとに銅82%、錫14%、鉛3%、ヒ素0.5%、銀0.5%での合金配合比で模造を製作した。佐波理の物理的な性質も再現するため、今回の模造において何通りかの熱処理を試みたが、最終的に「鐘青銅」を得ることはできなかった。ただし、試作の際に鉛を含まない、銅80%、錫20%の配合からなる青銅を用いて鑄造後に再加熱して急冷する熱処理した場合には「鐘青銅」を得ることに成功している。鉛を若干含む材料を用いて「鐘青銅」を得ることは今後の課題である。

今回の模造製作を依頼した般若氏は惣型鑄造を専門とする金工家である。経験豊富な同氏にとっても、外観のみならず、目に見えない金属の物理的性質まで再現を目指すのは、極めて困難な作業であった。なお、模造対象宝物の形状等については調査の項に譲る。

[模造品の製作材料]

佐波理（銅錫合金）

規型（内外共用）

鑄造用鉄製型枠

轆轤仕上げ用治具

[法量]

最大径17.2cm、高14.3cm、重さ2378.2g（宝物は2492.2g）

[製作工程]

①規型製作

規型は中心線を軸にして、360度回転させて原宝物の内外の形状を鑄型に写すためのもので、各鉢および蓋の中心線を通る垂直断面の形状を2等分した板に軸を付す。

なお、規型は外型の製作に用いたのち、製品の厚み分を取り除いて中子（内型）の製作に用いた。

また、規型は熔融した金属が冷える際に生ずる縮み代および轆轤で挽く際に削り取られる仕上げ代を見込み、原宝物の器体の厚みの約2倍の厚さに鑄上がるように作った。

②外型の製作

鑄造用の鉄製型枠内に鑄物土を必要な厚みまで盛り付け、規型の軸を型枠の中心に立てて回転させるいわゆる型挽きを行い、外型を11箇分製作した。

③中子（内型）の製作

外型と同様に中子用の規型で型挽きし、それによって出来た碗状の型の中に鑄物土を水で練ったものを入れて土饅頭状の中子を計11箇作った。

④中子納め

外型の内部中央に製品の厚み分の隙間をあけて中子を納め、湯口の孔を設けて、11口の鑄型

を完成させた。

⑤ 鑄込み

銅と錫の合金を溶融させて鑄型に流し込んで徐冷した。

⑥ 型ばらし

鑄型から取り外し、再び650ないし700 位に加熱して急冷した。その後に轆轤挽きできるように鑄浚いを行った。

⑦ 轆轤挽き

鑄上がった製品を各碗の内外の形状に合わせた治具を用いて轆轤に固定し、回転させながら、切削用のバイトで所定の厚み、形状に削り整え、最後に宝物と同じ位置に2重圈線を刻んだ。

[製作者]

般若昭三 (号 勘溪、日本工芸会正会員)

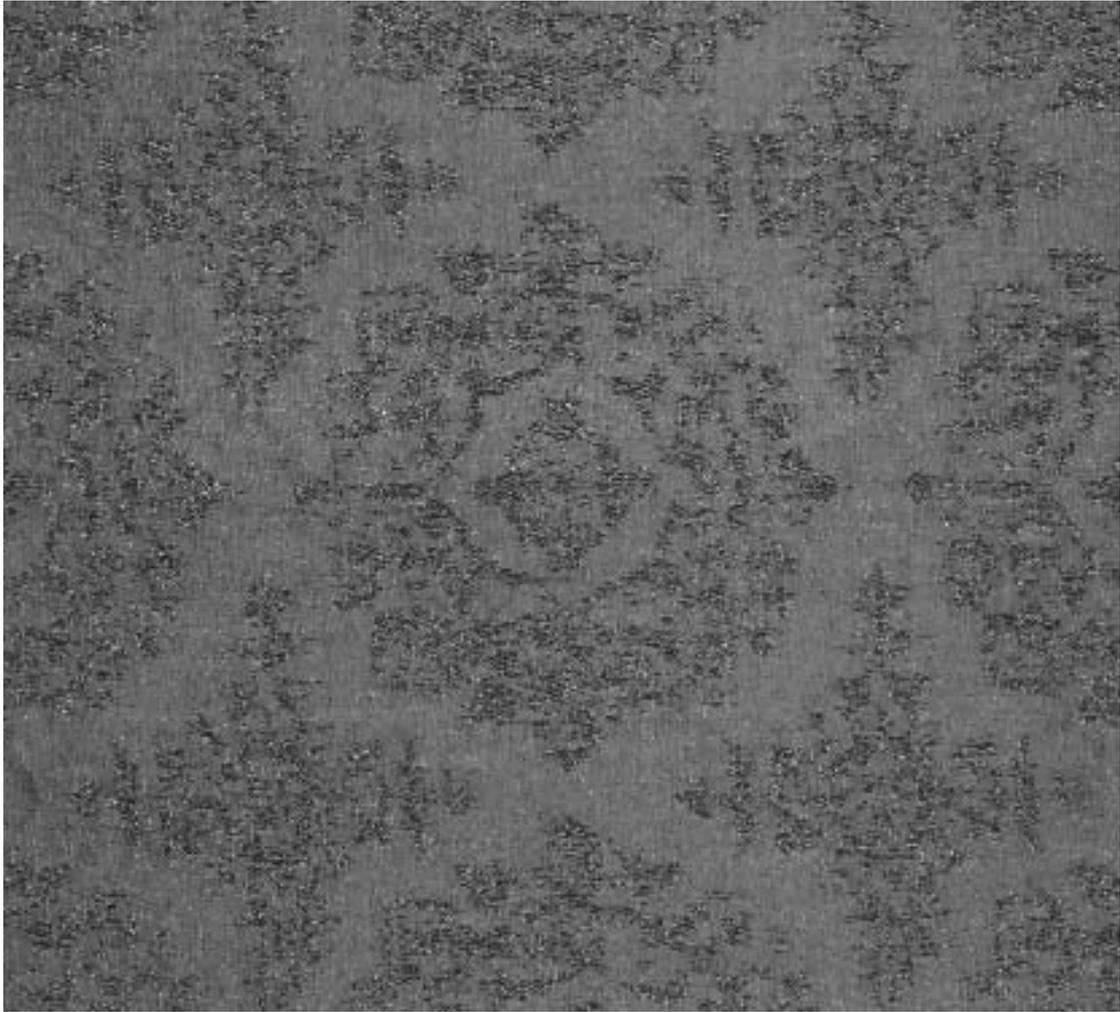
(西川明彦)

2 八稜唐花文赤綾 (挿図30~33)

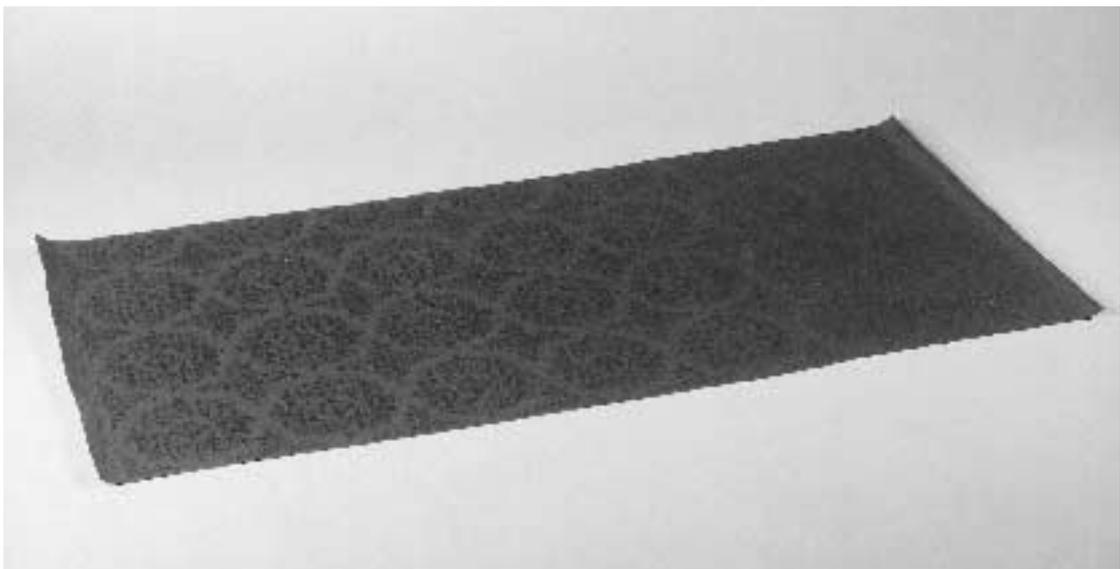
平成6年度より、10カ年計画のもとに、皇居内の御養蚕所より小石丸の繭の譲渡を受けて、奈良時代の絹織物の復元模造を開始した。小石丸の繭は、現在、奈良時代の絹織物を復元模造するのに最も望ましいといわれている。7年目にあたる本年は、八稜唐花文赤綾の復元模造を行った。

この綾を対象品に選んだ理由は、国家珍宝帳の注記に「緋綾囀」と記されていて由緒が明らかであること、織組織は奈良時代よりも古い時代に主流であったと考えられる平地綾文綾であるが文様は奈良時代に盛行した唐花文様であり特異性があること、外光に曝されることが少ない鏡箱の囀(内張り)であるため色彩が非常に鮮やかに保存されていることなどである。国家珍宝帳記載の鏡箱の囀は現在15口伝存しており、白紬製のものを除いて14口が八稜唐花文赤綾製である。今回の模造対象は、その中で最も色彩が鮮やかで文様が明瞭なものとした。なお、調査の結果、14口の囀に用いられている赤綾の中で、文様細部の形状から経・緯糸密度まで同一のものは存在しなかった。14口とも別裂で作られているのか、一幅の経糸本数が同じものの中には一枚の裂地から裁断されたものがあるのか、今後の検討課題である。

文様は、菱形花文の外側に八稜形を配しその周囲に八箇の側花形を巡らした主文と、パルメットと葡萄の果実を組み合わせた菱形花文の副文とを五の目に配したもので、正倉院の綾の中では代表的な唐花文様である。しかし、文様の形状が歪んでいたり文様を表す線の一部が途中で消えていたり、今日の織り傷に当たるものが顕著にみられた。それは、当時の文綾製織技術に問題があるのか、平地綾文綾という織り組織も影響しているのか不明である。ところで、今日でも古代の織法や織機が不明であるため、そのように不規則な織り間違いを製織過程で自然に再現することは困難であり、今回は、元の綾と同じ織り傷を正確に再現した綾(挿図30・31)と、古代に設計の段階で製織しようと目指したと考えられる文様形状の整った綾(挿図32



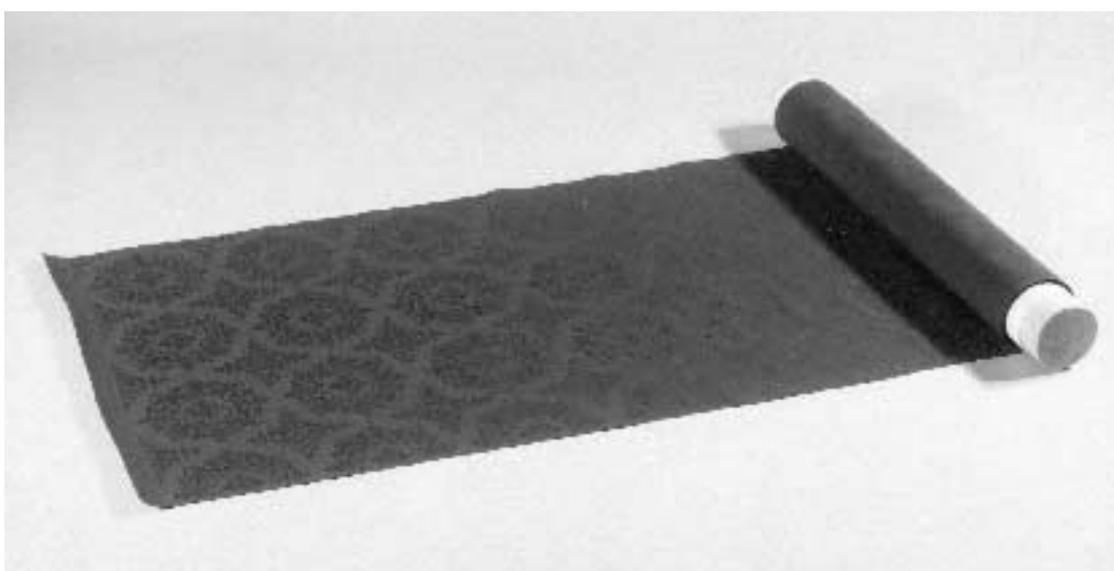
挿図30 八稜唐花文赤綾 模造品(元と同様の綾)部分 (×0.5)



挿図31 同上 全姿



挿図32 八稜唐花文赤綾 模造品（文様を整えた綾）部分（×0.5）



挿図33 同上 全姿

・33)との二種2点類を模造した。両者は、別の意味でそれぞれ復元模造品であると考えられる。

織機は、いわゆる厩機と称される手織りの高機にジャカード機を載せたものを使用した。

[模造対象宝物] 八稜唐花文赤綾 (北倉42 鏡箱 第8号 付属嘯)

[法量] 幅約56.4cm、長さ5m(うち4mは文様形状の整ったものとし、1mは元の綾の文様の乱れや織り傷を正確に再現した綾とした)を織成した。文丈約17cm、窠間幅約16cm。両耳を残す裂地は発見されていないので、一幅を1尺9寸(56.4cm)とみなし、それは3窠間半になるので、片一方の耳を副文の中間とし、他方の耳を主文の中間とした。

[仕様] 経糸の太さは70~100デニールとし、120デニールのものも約20%加えた。密度は凡そ50本/cmとした。緯糸の太さは平均180デニールとし、密度は平均30本/cmとした。

製糸は、糸に強い延伸力が加わらないように、自動製糸機の運転速度を通常の約半分に落として、丸く抱合性の良い生糸になるようにケンネル撚りを掛けて行い、それらの生糸を合わせて、上記の太さの経糸と緯糸とした。

製織は、元の綾通りの乱れた文様と整ったものを図面に描き起こして、それをコンピューターの画面上に移し、把釣りによる縁の凸凹線を全体の雰囲気壊さないようにどのように描くか検討して、緯糸一越しずつ修正し、その情報をもとにジャカード装置を動かして経糸を開口し、そこに緯糸を一本ずつ手織りした(文様はジャカードによるが、地組織は地綜統による)。なお、箆の前に刀杼(刀状の緯打具)を置いて緯打ちを行い、緯糸が緻密に織り込まれることで生じる文様の硬さを軽減するようにした。

[製作者] 株式会社川島織物

(尾形充彦・田中陽子)

正倉院展講座

奈良国立博物館における平成12年度正倉院展の公開講座には、三宅久雄が10月28日に出講し、「星とスッポン - 青斑石鼈合子をめぐって - 」と題しておよそ次のような内容の事柄を述べた。

本品はスッポンの形をした容器で、蛇紋岩（青斑石とも呼ばれる）から彫り出されており、腹部を八稜形に削り込んで、そこに同じ八稜形の高台付の皿がすっぽりとおさまるようになっている。一見ただけでは丸彫りの動物彫刻そのものであり、正倉院宝物の中でもユニークな品である。まことにリアルな表現で、繊細な技巧や華麗な装飾が衆目を集めがちな正倉院宝物の中にあっては、むしろ地味で目立たないが、写実表現ということではまず第一にあげられるべき作品であろう。専門家によると、このスッポンは今日では中国大陆から日本にかけて生息するシナスッポンであり、形態的特徴を正確にとらえているとのことである。

もうひとつの特色は甲にみられる七星文である。ほぼ中央に長さ約3.5センチにわたり、我々が見る北斗七星を裏返しにした形であらわされている。経年変化で肉眼ではほとんど見えなくなっているが、七つの星は円形に筋を彫り銀泥を塗り込め、これらを繋ぐ線は二条の筋を彫ってその間を金泥で塗っている。星座を器物にあらわした古代の作例としては、正倉院宝物中の御杖刀、大阪四天王寺や旧法隆寺献納宝物の大刀等があるくらいで、きわめて少ない。

奈良時代には瑞兆としての靈龜の出現がしばしばあり、この鼈合子に関連するものとして、和銅八年（715）に献じられ、靈龜改元の契機となった「背に七星を負う」龜のことが指摘されている。ただこれは大きさやその他の特徴が本品とは異なる。

さて、龜は古代中国では麒麟、鳳凰、龍とともに四靈の一に数えられ、丸い背は天を、平らな腹は地をあらわし、全体として宇宙を象徴するとされ、また、その甲は未来を占うものとされた。一方、北斗七星は天を治める天帝の車とされ、これに乗り中央をめぐり、四方を治め、四季、陰陽五行などを司るとされる。龜の背を天とするならば、天球儀のように星座が裏返しにあらわされていることも頷ける。中国の星図にも少ないがそうした例はある。龜と北斗七星、いかにもふさわしい組み合わせである。

ところで中国では古来より「七星散」という仙薬が伝えられている。我が国で平安時代に著された『政事要略』という古記録に、これに当たると考えられる淮南王七神仙散方という仙薬の処方と図解が伝えられている。調合する七種の薬種を裏返しにの北斗七星の各に配当し、その中の茯苓は太一すなわち天神の精といい、龜鼈の形をしたものを用いるとしている。龜は不老長生の代表格であり、北斗七星は延命を司ると言われる。我が国では体系的な道教の受容は行われなかったが、正倉院薬物の中には仙薬に関わり深いものもある。玄宗皇帝はとくに道教の信仰篤く、唐代文化摂取のなかで神仙思想の所産が伝えられたのであろう。この鼈合子は七星散という仙薬にまことにふさわしい容器である。（詳細は本誌23号掲載「青斑石鼈合子と仙薬七星散」参照）

（三宅久雄）

秋季定例御開封

平成12年度の西宝庫秋季定例御開封事業は、10月6日の御開封から12月1日の御閉封まで、57日間にわたって行われた。御開封には勅使坂本秀之侍従が櫻山和民正倉院事務所長の先導により西宝庫内を巡視、山口均書陵部長がこれに従った。また新藤晋海東大寺別当、鷲塚泰光奈良国立博物館長、斎藤誠治京都事務所長、湯川博正畝傍陵墓監区事務所長、生田瑞穂皇宮警察京都護衛署長らの参列を得た。

御閉封には、勅使水野豊侍従が櫻山和民所長の先導により西宝庫内を巡検、瀧島聡図書課長がこれに従った。また新藤晋海東大寺別当、鷲塚泰光奈良国立博物館長、大久保順人京都事務所次長、湯川博正畝傍陵墓監区事務所長、生田瑞穂皇宮警察本部京都護衛署長の参列を得た。

なお、東宝庫聖語蔵経巻収納戸棚の宮内庁長官封は、当分の間正倉院事務所長封を以て施す。

開封期間中には、宝物、経巻の点検と防虫剤入替、日本刀剣保存会幹事吉川永一氏による刀剣手入れ、宝物・経巻の台帳写真撮影、空調機械・計器の点検などの保存関係業務、宝物・経巻の調査、出陳関係の業務のほかに、次の調査、撮影などが行われた。

まず、部外の専門家に委嘱して行う宝物調査を2件実施した。一つは宝物中の刺繍を対象として技法調査を行った。本年は2カ年計画の初年度にあたり、調査対象宝物は、北倉の繡線鞋以下9件であった。調査員は大手前大学人文科学部教授切畑健、日本工芸会正会員・重要無形文化財保持者福田喜重、京都国立博物館学芸課工芸室長河上繁樹、東京国立博物館学芸部法隆寺宝物室主任研究官澤田むつ代の4氏に委嘱し、10月23～27日の5日間に実施した。

他は亀形工芸品を対象として、名古屋港水族館館長内田至氏に委嘱し、形態観察による亀の種類調査を10月13日に行った。対象宝物は北倉36紫檀木画碁局(抽斗の碁石容器)、中倉50青斑石鼈合子、中倉120雑色組縁飾残欠(木製金泥絵の亀形)の3件であった。

また、宝物模造事前調査は染織品2件について行った。一つは緯錦の唐花文錦を対象とし、調査は株式会社川島織物の高野、森ほか3氏に依頼し、10月30、31日、11月1日の3日間実施した。

他は七条織成樹皮色袈裟を対象とし、調査は、株式会社龍村美術織物坂上隆史、尾松茂男、岩間利夫、岩間福治、白井進の5氏に依頼して、11月13日から15日までの3日間に実施した。

次に出願による文書・経巻の調査・撮影は、東京大学史料編纂所長出願の正倉院古文書調査が5日間、東大寺図書館長出願の聖語蔵経巻調査が3日間、国立歴史民俗博物館長出願の正倉院古文書複製のための撮影が5日間、それぞれ行われた。

宝物の出陳は、恒例の奈良国立博物館での「正倉院展」で、79件の宝物・経巻を出陳した。期間は10月27日を招待日とし、一般公開は10月28日から11月13日までの17日間とした。一般公開中の観覧者は115,505人であった。出陳品目は後掲の別表1の通りである。

また、正倉外構の一般公開にともなう観覧者総数は、平成12年4月1日から平成13年3月31日までの1年間に133,475人であった。

(三宅久雄)

表1 平成12年度「正倉院展」出陳宝物

区分	番号	品目	数量	備考	区分	番号	品目	数量	備考
北倉	14	緑牙撥纏尺 乙	1枚		中倉	115	紫檀金銀絵小合子	1合	
"	15	白牙尺 乙	1枚		"	116	紫檀銀絵小墨斗	1口	付 旧糸車
"	27	螺鈿紫檀琵琶	1面		"	127	水精玉	8枚	盛網袋1口
"	28	紅牙撥纏撥	1枚		"	145	紫檀木画箱 第17号	1合	
"	155	青斑鎮石 第9・10号	2挺		"	147	檳榔木画箱 第20号	1合	
"	180	赤漆小櫃	1合	納青斑鎮石、付牌	"	176	籠箱 第1号	1合	
"	182	縹地唐草花鳥文夾纏綿 第48号	1片	東大寺屏風2畳の内	"	177	粉地花形方几 第2号	1枚	
中倉	1	棊弓 第1号	1張	付 残弦	"	177	粉地彩絵几 第9号	1枚	付 白綾几褥1張
"	2	棊弓 第12号	1張		"	177	漆八角几 第20号	1枚	
"	3	鞆 第2号	1口		"	202	紫地獅子奏楽文錦	1扇	新造屏風 第20号
"	4	赤漆葛胡祿 第5号	1具	箭45隻共	南倉	7	磁瓶	1口	
"	4	漆葛胡祿 第21号	1具	箭50隻共	"	8	磁皿 甲1号	1口	
"	4	白葛胡祿 第28号	1具	箭47隻共	"	8	磁皿 丙8号	1口	
"	6	箭 雉羽 第40号	39隻	付 模造箭2隻	"	8	磁皿 丙9号	1口	
"	6	箭 彫雄染羽玉虫飾 第43号	7隻	付 模造箭2隻	"	9	磁鉢 丙4号	1口	
"	11	鉾 第5号	1枚	身・柄揃	"	11	銀鉢 第4号	1口	
"	11	鉾 第15号	1枚	身・柄揃	"	51	犀角銀絵如意 第7号	1枚	旧甲
"	11	鉾 第27号	1枚	身・柄揃	"	52	赤銅柄香炉 第2号	1口	
"	11	鉾 第28号	1枚	身・柄揃	"	53	鉄三鈷	1枚	
"	15	正倉院古文書正集 第14卷	1巻	和泉監正税帳(天平9)・ 摂津国正税帳(天平8)	"	53	素木三鈷箱	1口	
"	15	正倉院古文書正集 第41卷	1巻	豊前国上三毛郡塔里戸籍 ・加自久也里戸籍(大宝2)	"	56	雜玉誦数 第14号	1条	付 題箋
"	16	統修正倉院古文書 第10卷	1巻	山背国愛宕郡計帳 (天平4)	"	70	円鏡 第3号	1面	鳥獸花背 付 旧緒
"	16	統修正倉院古文書 第17卷	1巻	郡司真人解 (天平14)ほか	"	70	漆皮箱	1合	円鏡第3号付属
"	16	統修正倉院古文書 第22卷	1巻	造甲加寺所解 (天平17)ほか	"	70	十二稜鏡 第6号	1面	黄金瑠璃鈿背、付 模造
"	17	統修正倉院古文書後集 第29卷	1巻	奉写一切経所布施申 請解(宝亀4)	"	70	八角鏡 第12号	1面	鳥獸花背
"	19	正倉院塵芥文書 第39卷	1巻	伊予国正税出挙帳 (天平8)	"	71	漆皮八角鏡箱 第3号	1合	旧大
"	50	青斑石龜合子	1合		"	112	甘竹律 第1号	1口	付 楸木帯・模造
"	52	斑犀尺	1枚		"	112	甘竹律 第2号	1口	
"	58	竹帙 第3号	1枚		"	113	鉄方磐	9枚	方響
"	63	斑蘭帙 第1号	1枚		"	117	棗梓 第1号	1枚	刃有枝
"	64	金字牙牌	1枚		"	117	棗梓 第2号	1枚	木刃三叉
"	65	経帙牌 第1号	1枚		"	134	赤地錦半臂 第1号	1領	
"	65	経帙牌 第2号	1枚		"	150	浅緑綾几褥 第34号	1張	
"	65	経帙牌 第4号	1枚		"	179	緑地狩獵文錦 第75・76号	1扇	新造屏風 第5号
"	65	経帙牌 第8号	1枚		"	180	赤地鴛鴦唐草文錦大幡脚端飾 第8号	1枚	
"	93	雜帯 第8号	1条		"	180	黄地雲鳥花文臈纒羅 第54号	1片	
"	105	琥珀魚形	1隻		"	185	錦道場幡	1旒	第126号櫃 第98号 (幡類残欠百參拾八裏の内)
"	110	斑犀小尺	1枚		"	185	夾纒羅幡残欠	1旒	第127号櫃 第30号 (幡類残欠百參拾八裏の内)
					聖語蔵	2 5	大智度論 卷54	1巻	
					"	3 78	十誦律 卷33	1巻	
					"	4 64	説無垢称経 卷1	1巻	

天皇陛下御即位十年記念特別展 「よみがえる正倉院宝物 再現された天平の技」の開催

正倉院宝物の模造品は明治時代に入って本格的な制作が行われるようになった。また正倉院事務所では昭和47年以来、継続して復元模造事業を実施し現在に至っている。昨年度は天皇陛下の御即位十年を記念し、東京国立博物館と奈良国立博物館の協力を得て、同館及び正倉院事務所保管の模造品を紹介するため、宮内庁、朝日新聞社と各開催館との共催により、3会場において展覧会を催した（詳細は本誌23号参照）。本年は愛媛県歴史文化博物館からの要望により、同館において下記のとおり開催した。総展示件数は65件、うち正倉院事務所出品は螺鈿槽笠篋以下44件であった（今回は東京国立博物館保管品は出陳しなかった）。

会 場 愛媛県歴史文化博物館
期 間 平成12年5月20日～6月18日（26日間）
入場者数 8,340人
主 催 宮内庁、愛媛県歴史文化博物館、朝日新聞社
協 力 奈良国立博物館
後 援 社団法人日本工芸会、NHK松山放送局、南海放送、テレビ愛媛、あいテレビ、
愛媛朝日テレビ、愛媛CATV、FM愛媛
協 賛 日本通運株式会社

（三宅久雄）

保存環境調査

（1）金属板腐食試料調査

本調査は東西両宝庫内の空気調和の効果を確認するためのものであり、例年通り神戸大学藤居義和助教授に委嘱して行った。

調査は平成11年12月から平成12年10月の約10ヶ月にわたるもので、所定の6箇所（西宝庫中倉1階、同前室、西機械室還気ダクト、東宝庫北室2階、同前室、東機械室還気ダクト）にそれぞれ銀、銅、鉄の板状試料と、銀、銅の蒸着膜試料を配置して、空気中に暴露させ、前者を用い反射率の測定を、また後者を用い腐食生成物の同定（電子線回折法による）を実施した。金属板の反射率の低下が小さい状態が望ましい保存環境といえよう。反射率の低下は、銀板について言えば、東宝庫北室2階が、また銅板について言えば、東宝庫前室が、他の箇所と比べはつきりと悪いが、他はいずれも反射率の低下がわずかであり、本質的に環境の違いに優劣は認められなかった。

以前は西宝庫中倉1階がもっとも優秀な保存環境を示し、西宝庫前室がそれに次いでいたが、

表2 「よみがえる正倉院宝物」展出品一覧

模造品名	員数	所蔵者	模造品名	員数	所蔵者
袈裟箱袋	1口	正倉院事務所	螺鈿箱	1合	正倉院事務所
袈裟箱	1合	正倉院事務所	螺鈿箱囃	1口	正倉院事務所
緑牙撥鏤把鞘金銅莊刀子	1口	奈良国立博物館	雑帯	5条	正倉院事務所
黒漆三合鞘刀子	1口	奈良国立博物館	紫檀木画箱	1合	正倉院事務所
紅牙撥鏤尺	1枚	正倉院事務所	蘇芳地金銀絵箱	1合	正倉院事務所
銀平脱合子	1合	正倉院事務所	白檀八角箱	1合	正倉院事務所
紅牙撥鏤撥	1枚	正倉院事務所	黒柿両面厨子	1基	奈良国立博物館
木画紫檀双六局	1基	奈良国立博物館	漆挟軾	1基	正倉院事務所
金銀鈿莊唐大刀	1口	正倉院事務所	粉地彩絵八角几	1枚	正倉院事務所
呉竹鞘御杖刀(刀身)	1口	正倉院事務所	六カ国調白純	6点	正倉院事務所
花鳥背八角鏡	1面	正倉院事務所	文羅(小菱格子文白羅、子持並ビ 三ツ菱文白羅)	2点	正倉院事務所
白葛胡祿	1口	正倉院事務所	伎楽人形(呉公・呉女・迦楼羅)	3組	奈良国立博物館
漆葛胡祿	1口	正倉院事務所	漆彩絵花形皿	1枚	正倉院事務所
赤漆葛胡祿	1口	正倉院事務所	螺鈿槽箆篋	1張	正倉院事務所
箭	15本	正倉院事務所	漆槽箆篋	1張	正倉院事務所
金銅莊大刀	1口	正倉院事務所	二彩鉢	1口	正倉院事務所
黒作大刀(刀身)	1口	正倉院事務所	琵琶袋	1口	正倉院事務所
黒作大刀(外装)	1口	正倉院事務所	甘竹簾	1口	正倉院事務所
天平六年尾張国正税帳 (正倉院古文書正集第15巻)	1巻	正倉院事務所	磁鼓	1口	正倉院事務所
播磨国郡稻帳 (正倉院古文書正集第35巻)	1巻	正倉院事務所	破陣楽大刀	1口	正倉院事務所
筑後国正税帳 (正倉院古文書正集第43巻)	1巻	正倉院事務所	染色羅(小菱格子文黄羅、入子菱 格子文赤茶羅)	2点	正倉院事務所
大宝二年御野国加毛郡半布里戸籍 (続修正倉院古文書第3巻)	1巻	正倉院事務所	三カ国染色純	3点	正倉院事務所
天平宝物筆	1本	正倉院事務所	讃岐国調白純	1匹	正倉院事務所
青斑石蠶合子	1合	正倉院事務所	白橡綾錦几褥	1張	正倉院事務所
紺玉帯	1条	正倉院事務所	紫檀金銀絵書几	1基	奈良国立博物館
			校倉模型	1基	奈良国立博物館

最近は東西の機械室還気ダクト内と比べても明らかな優位は認められない。腐食生成物は銅についてはCu₂Oが検出された。また銀は昨年同様、AgOが検出されている。以前認められていたのはAg₂Sであり、これは庫内のイオウ酸化物濃度が低くなったことを示すのかも知れない。

宝庫全体としては引き続き良好な環境を維持していることを確認した。

(2) 二酸化鉛法によるイオウ酸化物汚染度の調査

本調査は正倉院宝庫内のイオウ酸化物濃度を定量的に把握するための調査である。二酸化鉛円筒試料を平成11年12月から平成12年10月にかけて西宝庫中倉1階戸棚内、同戸棚外、西宝庫前室に各1本ずつ配置暴露し、回収後定法に従い定量した。

各所とも汚染度は0.001 (mgSO₃ / day / 100cm² / PbO₂) 以下と清浄であった。

(成瀬正和)

『新訂 正倉院宝物 染織』上・下の出版

正倉院事務所の事業として古裂第一次調査が行われ(昭和28~37年)その成果として宮内庁蔵版『正倉院宝物 染織』上・下(正倉院事務所編、朝日新聞社発行、昭和38・39年)が刊行されたのは、40年近く前のことである。この原寸大の大型原色図録には錦、綾、平絹、羅、紗、刺繍、夾纈、臈纈、絞纈、彩絵、摺絵、麻布など正倉院裂全般にわたる主要な裂地218点が、上下二巻に分けて掲載された。爾来、図版の色彩の正確さや充実した解説により、正倉院裂の理解するための最も優れた図録であるとの定評を得てきた。

しかし、40年近くを経る間に、染織品整理事業の進捗により新たな裂地が発見され、さらに、従来の図録の資料性を高める必要性が出て来た。そのため、耳、裂地の端、破れた部分など、実際の姿に近いものを掲載し、文様の正確な復原図を掲載して実物ではわかり難い文様の細部を見やすくし、掲載した裂地ごとに正倉院の整理番号(御物目録番号や整理容器番号)を逐一示して、他の図録や正倉院紀要などの報告書と関連付けられるようにすることにした。

旧版の染織図録に先立って刊行された器物が中心の正倉院宝物図録である三巻本の宮内庁蔵版『正倉院宝物』北倉・中倉・南倉(正倉院事務所編、朝日新聞社発行、昭和35~37年)の増補改訂版が既に昭和61~63年に刊行されていたことも新訂版染織図録出版の必要性を促し、平成10年から新訂版の正倉院染織図録刊行に向けての準備が開始された。今回の新訂版でも、原寸大の原色図版を掲載したが、図録の大きさは旧版のA3版から扱い易いB4版に改めた。図版の選定は、近年の調査により法隆寺献納宝物裂であることが明白なものは掲載しないが、それ以外の旧版の図版は全て収録し(一部、文様が同じ別裂に差し替えた図版がある)、旧版に収録されていない図版を出来るだけ多く収録する方針で行なった。その結果、新たに約60点の図版を収録した。さらに、ほとんど全ての図版について、新規に写真撮影した。

平成12年7月に上巻(図版135点)が、同13年4月に下巻(図版133点)が刊行された。

(尾形充彦)

『宮内庁正倉院事務所所蔵 聖語蔵経巻』第1期 隋・唐経篇の出版

聖語蔵経巻は、東大寺尊勝院に伝来した経巻群で、明治26年に皇室に献納されたものである。以来、経巻は正倉院宝物に準ずる管理体制のもとにおかれ、現在では東宝庫南室階下東戸棚内に収蔵されている。

その内容は、中国隋唐の写経、奈良時代の天平・神護景雲の写経を中心に、平安鎌倉におよぶ写経・版経などに及び、総数は、昭和5年作成の『正倉院聖語蔵経巻目録』によると4960巻を算える。経巻の整理・修理は、明治43年に開始され、現在までに90パーセント以上の巻数について作業を終えている。戦後には経巻調査書も作成されるようになったが、これらの蓄積を踏まえて、このたび新たに聖語蔵経巻全巻の出版の計画が企画された。

出版の実施については、丸善株式会社からの提案があり、同社と協議を重ねた結果、カラーマイクロフィルム撮影のうえデジタル化した良質のカラー画像を、CD-ROMの形態で出版する、という方法が最も合理的であるという判断を得るに至った。

当所では、まず、明治末年に経巻の修理作業が開始されてから現在に至るまでの経巻整理の過程について経巻目録・修理記録・調査書・台帳写真に基づく資料整理を行った。さらに経巻原本については、県立広島女子大学教授米田雄介氏（前正倉院事務所長）を調査員に委嘱して、経巻1点ごとの事前点検・撮影用記録シート作成をお願いし、撮影時に写し込む目録番号・経巻名の検討をあわせて行った。

この間、丸善側は富士写真フイルム株式会社と提携、撮影やデジタル化にともなう各種の技術的な問題の解決、製品化に当たっての仕様などに検討を加え、当所もトライアル撮影に応じるなど、共同して事に当たった。

以上の準備を踏まえ、平成10年5月、丸善株式会社から正式の出版願いが提出され、6月には実施が正式決定の運びとなった。あわせて、事業の重要性に鑑み、学識経験者に全体方針を報告してその適否につき意見をうかがう必要性ありと判断し、同じ月に宮内庁次長主催の「聖語蔵経巻出版事業検討会」が開かれた。中村元（学士院会員・仏教学）、築島裕（同・国語学）、皆川完一（正倉院懇談会会員・歴史学）、森本公誠（東大寺教学執事）4氏を迎えて、正倉院事務所からの計画概要報告、出席者からの質疑応答が行われ、結論としては本事業が学術文化的に極めて意義深いものである点、満場一致の賛同を得た。

以後、平成11年の第1回撮影を皮切りに、平均1回1週間、年2回ペースで撮影を行い、平成12年5月、第1期として『正倉院聖語蔵経巻目録』の類別でいう第1類隋経・第2類唐経計243巻から刊行を開始したのである。

（杉本一樹）

宮内庁正倉院事務所職員録（平成14年3月現在）

所長	事務官	櫻山和民
庶務課		
	課長 事務官	安田 勉
庶務係	係長 事務官	中西時夫
	（兼）同	森中 智
	（併）技官	中西昭彦
	作業補助員	井元豊子
会計係	係長 事務官	三木善明
	同	森中 智
保存課		
	課長 技官	三宅久雄
整理室	室長 技官	尾形充彦
	同	田中陽子
	同	好地 伸
	（修補師長補）	
	同	吉松茂信
	（修補師）	
	同	福森 弘
	同	長尾光也
	専門職 技官	山中五郎
調査室	室長 技官	杉本一樹
	主任研究官 技官	西川明彦
	技官	飯田剛彦
	事務補佐員	稲垣幸江
保存科学室	室長 技官	成瀬正和
	（併）技官	北田仁司
	宝物調査員	米田雄介